

大鹿村中央構造線博物館たより 111号



2018年8月発行

TEL/FAX:(0265)39-2205 E-MAIL:mtl-muse@osk.janis.or.jp

安康露頭がきれいに露出しています！

7月初旬の大雨で、村内では、幸い人的被害はなかったものの、村内各所が土砂崩れで通行止めとなり、開催予定であった博物館イベント「大鹿村ジオツアー」も残念ながら中止となりました。一方で、安康露頭付近は、川の増水により、露頭表面が水流に洗われ、とてもきれに見える状態となりました（写真1, 2）。露頭の周辺には、新しい階段状の地形ができていました（写真3）が、これは、いったん写真3の矢印の高さまで土砂で埋まり、その後に流水により削られたのではないかと考えられます。また、青木川の左岸側（写真2川の手前側）でもあちこち岩が露出し（写真4）、青木川を渡らなくても目の前で、露岩の観察ができるようになりました。



写真1 2018年4月時点の安康露頭



写真2 2018年7月豪雨後の安康露頭



写真3 増水時にたまった土砂が残っています



写真4 青木川の左岸側でもあちこち岩が露出しています

また、以前より、安康露頭解説看板より少し下流側の一角に、やわらかい粘土が発達した新露頭があり、最新の断層活動の痕跡であるかもしれないということで、ブルーシートをかけて保護していましたが、今回の豪雨後に、ブルーシートは土砂に巻き込まれて下流側に移動してしまい、露頭部分も流水に洗われて、以前より広い範囲がきれいに見えるようになりました。そこで、早速、河本学芸員が、中央構造線博物館創設時に監修をしてくださった地質学者の松島信幸先生をお連れして、現場を見ていただきました。まだ調査中の大切な露頭なので、なくなってしまうまいよう、再度ブルーシートで覆いましたが、今後も、見学会のときなどに限り、ブルーシートを外して、見ていただけるようにする予定です。（宮崎）



写真5 新露頭の露出部分が広がった



写真6 炎天下の中、観察中の松島先生

大鹿村の豪雨時の雨量はどのくらい？

7月初旬の大雨は、大鹿村内では強い雨が降る時間は短かったものの、長く雨が降り続いたため、累積雨量はかなり大きいように感じられました。そこで、昨今の豪雨時の雨量と比較してみることにしました。

具体的には、気象庁のwebページから、気象台の大鹿観測点の2018年7月のデータに加えて、過去に豪雨があった2006年、1983年の昭和58年災害時について、降雨量の多かった日の前後6日間の日雨量を取得し、グラフにしてみました。1961年の昭和36年災害時のデータも探したのですが、気象台の大鹿観測点のデータは、1976年以前のものが見つからなかったため、社団法人中部建設協会編『想いおこす三六災害』に記載のあった大鹿観測所（おそらく気象台ではなく、国土交通省の観測所のデータのような）の値を参考までに、グラフにしてみました。

これを見ると、やはり36災害のときは突出して雨量が多かったようです。何日も雨が降り続けている上に、1961年6月27日の1日で275mmも降っています。ちなみに、大西山が崩れたのは、雨がいったん上がった29日の朝です。次に、1983年の豪雨を見てみると、9/27と28の2日間に集中していますが、28日は日雨量200mm近くも降っています。一方、2006年の豪雨は、日雨量の最大値は、4時期の中で最も少ないものの、長く雨が降り続けているため累積雨量は1961年に次いで多くなっています。私は、1961年、1983年、2006年の豪雨を経験していないので、実際に経験された方がおられましたら、当時の様子をお聞かせいただくと幸いです。（宮崎）

